

反原発 アイリーン・スミスさん(40)

はし持ち歩くとコピーをガバガバ使う矛盾に気づくの

チェルノブイリ原発の事故や四国電力・伊方原発の出力調整試験をきっかけにした全国的な反原発、脱原発運動のうねりが、さまざまな壁にぶつかったり、国や電力会社の巻き返しに合ったりして一時の勢いがみられない。でも、この人はまずまず元気、そして明るい。亡くなった夫のユージン・スミスさんとともに水俣病の被害を世界に訴えた写真家として有名だが、今は京都に住み、一人の母親としてあの手で原発の安全性を問い続けている。

◆どうして反原発運動に取り憑かれたのか、住民同士が組むようになったんですか。話し合っただけで変えていくしかない。「誘われて一九八〇年に初めて米国・スリーマイル島に行つたの。住民の聞き取り調査をしたんだけど、事故の時、変な味増殖炉「もんじゅ」に反対してがしたとか、動物が死んだとか、そういう話をいっぱい聞いた。なのにアメリカ政府はきちんと健康調査もしていないの。政府や電力会社なん

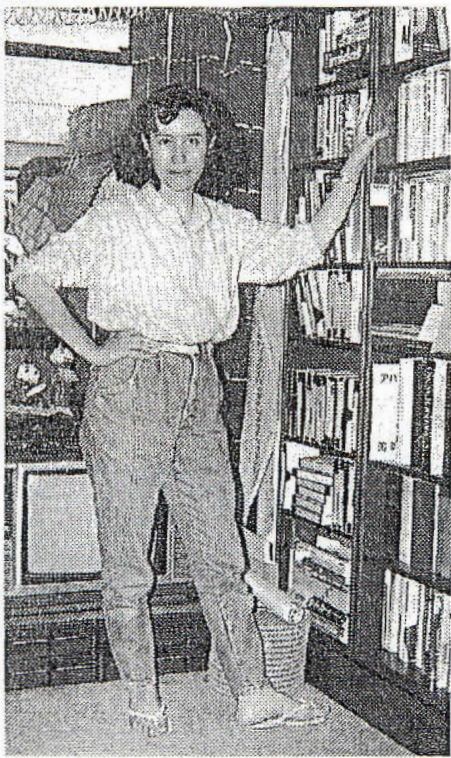
死の灰残す暮らしとは

えるブルトニウムを燃料に使うんです。今の政府がそのブルトニウムを使わなくても、世界情勢が変わったら、その時の政府が核兵器を作らないとは限らないでしょ。でも、あまり知られていない。お金がないから募金集めもしたい。たとえば不動態

でもうけた人が「お金をうけたく、噴き出して原子炉が空だきけでいいのだからか。何か世の中のためにすることをしたい」とボクとお金出してくれるってかっけはしい」

◆細管の説明に、家の庭から持ってきたゴムホースを使うなら難しい原発の話を分かりやすく説明されますね。◆「原発の問題は、結局、死の灰を自分たちが残したまま死んでいってしまうこと。これま

◆「暗室に入つて気がついたら夜中ってこともあるし、小さな子供がいるときはないのよ。子ども、まだコピーをガバガバ使ってる自分の矛盾に気づくのよ」



父はアメリカ人、母は日本人。一九七二年から三年間、ユージン・スミス氏と水俣に住み、八〇年にフォトエッセー「水俣」(日本語版)を出版。現在、立命館大学で時事英語を教える。二十歳と六歳の子供と京都市左京区に住む。

京都府に原発の問題で申し入れに行ったり、「もんじゅ」の見学ツアーを企画したり、細かいことにはこだわらずのびのびとやっている感じだ。行動力も抜群。その一方で、周囲への心づかいも忘れない。スリーマイル島の聞き取り調査で相手の顔写真を撮っていない。「全部吸い出すように精いっぱい話してもらって、そのうえ写真撮らせて、なんていえないかったの」